

# 「私そんなに生意気に見えますか」

——『三四郎』論——

佐藤裕子

## はじめに

『三四郎』はそれ以前の他の漱石作品との構造上の類似あるいは対比をしばしば指摘されてきた作品である。とりわけ（小川三四郎の上京）をめぐる、佐々木充氏は『坊つちやん』の「主人公」と「小川三四郎の二人が、ともに旅人としてではなく生活者として、本質の地を離れて異郷の地へ身を投ずる」<sup>(1)</sup>点に両作品の類似を指摘し、また小泉浩一郎氏は『草枕』と『三四郎』が「都市から山村へ、山村から都市へ、という二つの作品に示された空間移動の対比的図式」<sup>(2)</sup>こそが「両作品における作者の主題追求のヴェクトルの明確な差異を象徴する」<sup>(3)</sup>と両作品の対比を指摘している。さらに『虞美人草』と『三四郎』を比較すると、<sup>(4)</sup>『虞美人草』という作品は小野が五年前に京都から東京に移動し藤尾と出会うことが物語の不可欠の

要素であることを考えると、先の両氏の指摘と併せて『坊つちやん』『草枕』『虞美人草』『三四郎』の四作品が（細部の異動はあるにしても）、（遠いところからやってきた一人の青年がすでに進行しつつある出来事に途中から参加し立ち会ってゆく）という共通の構造を持つことが理解出来る。のみならずこの『三四郎』の構造は、これ以降も『彼岸過迄』の敬太郎や『ころ』の「私」の果たす役割において繰り返され、漱石作品の根幹を成す重要な基本構造となつてゆくのである。

そもそも（一人の青年の上京）が発端となつて物語が始められるという構図は、最も少なく見積もつても次の三つの物語を既にその内部に孕んでいる。すなわち（青年の上京以前）の物語と（上京以後）の物語、さらに（青年の上京に関わりなく既に東京で展開されていた物語）の三つである。本稿においては、作品を以上の三点か

ら切り取り、三四郎の〈過去〉と〈現在〉とにおいて展開された物語の内実を解明するとともに、とりわけ美禰子の結婚の意味をシェイクスピアの『ハムレット』と比較検討することによって解明することを目的とする。

註 (1) 佐々木充『三四郎』論「千葉大学教育学部研究紀要」二十九、一九八〇年十二月

(2) (3) 小泉浩一郎『三四郎』論——美禰子・そのもう一つの画像をめぐる「東海大学紀要文学部」四十七、一九八七年九月

(4) 平岡敏夫(『三四郎』『漱石序説』一九七六年十月)氏は『虞美人草』の「京都から孤堂・小夜子父子という『過去』が、藤尾・小野の『文明』に向かって上京」する構図が、『三四郎』においては「過去」が「三四郎」に置き換えられた上で繰り返されていることを指摘する。しかし本稿においては、何よりも小野の上京こそが三四郎の上京と重なると考えている。

### 一 上京前の三四郎の物語

確かに『三四郎』は、それ以前の作品の中のいくつかの特徴的な図式をそのまま投影した作品であるといえる。例えば登場人物の構図を考えると、野々宮兄妹・里見兄妹という適齢期にある二組の男女と、そこに加わることになる今一組の男女として三四郎と三輪田のお光さんをあてはめて考えると、それはそのまま『虞美人草』の

甲野兄妹・宗近兄妹と小野さんと許婚者の小夜子の姿と重なってくる。さらに宗近一が甲野の妹藤尾との結婚を望むが結ばれず、今一人藤尾との結婚を望んだ小野さんも、最終的には藤尾を離れ、許婚者であった小夜子の元に帰るといふ構図、つまり一人の女性の結婚をめぐる、その候補者として二人の男性を配し、結局どちらの男性とも結婚しないという構図もまた『三四郎』において繰り返されている。美禰子は結婚相手と目されていた野々宮とも、その後現れた三四郎とも結婚しないのだ。さらに結婚相手の候補者の一人が最終的に許婚者の元に返るといふ図式も、三四郎が母が望む三輪田のお光さんとの結婚に踏み切る可能性を考えるならば、『虞美人草』で展開された図式がほぼ踏襲されているといえる。

『虞美人草』において小夜子が「過去の女」(『虞美人草』九)と規定されたように、「三輪田のお光さん」もまた、三四郎が「脱ぎ棄てた過去」(四)に属する女性として、三四郎の母と同様作品中に現実の姿を現すことはないが、その果たす役割は重要である。まず作品冒頭部で三四郎が「京都から相乗」(一)となった女を「異性の味方を得た心持がした」(同)と考えたのは、その女の肌の色が浅黒く、「三輪田のお光さんと同じ色」(同)だったからである。つまり、ここで「三輪田のお光さん」は三四郎にとって「故郷」(同)を代表する「九州色」(同)の肌の色を有した「異性の味方」

(同)として登場し、三四郎の女性に対する判断の基準となつていくということである。また二章の終わり、三四郎が「大学の池の縁で逢った女」(二)すなわち美禰子について何を思い出すかといえは、「黒眼の動く刹那」(同)でもなく、また彼女が落とした「白い花」(同)でもない。下駄を貰おうと立ち寄った下駄屋で「石膏の化物の様に座つてゐた」(同)娘の「真白に塗り立てた」(同)その肌の色から連想して、「薄く餅を焦した様な狐色」(同)の「顔の色ばかり考へ」(同)ていたというのである。ここでも三四郎が「女の色は、どうしてもあれでなくつては駄目だと断定した」(同)その根本には女の「肌の原形」(3)としての三輪田のお光さんが存在しているのである。

さらにまた日本小間物屋で「蟬の羽の様なりボン」(二)を買った野々宮に触発されて鮎の御札に「三輪田のお光さん」(同)に「何か買つ」(同)てやろうと考えた三四郎がその思いつきをとりやめるのは、その贈り物にお光さんが「何だかんだと手前勝手な理屈を附けるに違ひない」と考えたからである。それはつまり三四郎が、自分からの贈り物に別な意味を与えるお光さんの心情を知っているということである。

また四章においては、母の手紙を読む三四郎が手紙の中にお光さんの話題が出て来ることを予想する場面が出てくる。これはそれだ

けお光さんと三四郎の家とが親しく行き来をしていることを暗示するものであるのだが、さらにここで三輪田のお光さんと三四郎との結婚の話が正式に交わされているのだ。しかもここで三四郎がこの縁談について何を考えたかには一切言及することなく、「手紙を巻返して、封に入れて、枕元に置いた俵」(四)眠りについたことが語られているのである。

さらに八章では、三四郎が美禰子のもとに二十円の金を借りに行つた帰りに、美禰子と「連れ立つて」(八)歩きながら、美禰子とお光さんを比較して考える場面がある。「普通の女性以上の自由を有」(同)する美禰子に、「三輪田のお光さんの様な生活を送れと云つたら、何うする気かしらん。」(同)というものであった。ここでもお光さんが三四郎の価値判断の基準になっていることが理解できるであろう。

続く九章では精養軒での会食の折に、お光さんが「縫ひ上げた」(九)「黒の袖の羽織を着」(同)て出席しているし、また十一章においては、広田先生を東京帝国大学文科大学の外国語講師に招聘するという与次郎の企みに巻き込まれ意気消沈した三四郎のもとに届いた母からの手紙にやはりお光さんのことが出てくる。そこには冬休みには帰省することを促すとともに、お光さんも「待つてゐる」(十一)こと、お光さんが「豊津の女学校をやめて、家に帰つた」

(同) こと、さらにお光さんに「縫つて貰つた綿入」(同) を小包で送つたことなどが記されていた。そしてここでも三四郎はこれらの母からの知らせに対して何を考えたかは明らかにされることなく、「長い手紙を巻き収めてゐる」(十一) 三四郎の姿が語られるだけなのだ。

これらの記述から推測できることは、三四郎の故郷の熊本では三四郎とお光さんの結婚話が両家の合意に基づいた公認の事実として進められていることと、この縁談に対して「三四郎が断固断つた形跡がな」<sup>(5)</sup> ということ、さらにお光さんが〈未知の女性〉や、あるいは〈理解しがたい女性の一面〉に遭遇した時の三四郎の判断の基準となり、「直接には登場しないが、三四郎の意識と行為を牽制する人物」<sup>(6)</sup> として存在しているということである。『吾輩は猫である』十章において水島寒月が故郷で結婚して戻ってきたことを考えると、玉井敬之氏の指摘するように、三四郎がこの冬休みの「帰郷の間に御光さんと婚約」<sup>(7)</sup> あるいは結婚する可能性は高いのだ。しかも水島寒月が結婚したのは彼に「相当」『吾輩は猫である』十一の、お光さんと同じ浅黒い肌の色をもつた女性だったことを忘れてはならない。しかも三四郎はお光さんの属する「第一の世界」(四) を、「いざとならない以上は戻る気がしない」(同) という条件つきではあるにせよ、「帰るに世話は入らない」「戻らうとすれば、すぐに戻

れる」(同) 世界と位置付けるのである。そしてこれこそが三四郎の(上京以前から続く物語、すなわち物語の表面には現れないが) 厳然たる事実として存在し、東京で展開される物語と平行して熊本において繰り広げられているもう一つの物語なのだ。

註 (1) 玉井敬之「三四郎の感受性——『三四郎』論」『講座夏目漱石3』

有斐閣、一九八二年二月

(2) 片岡豊氏(『三四郎』論序説——美禰子の〈愛〉・広田の〈愛〉

——「作新学院女子短期大学紀要」十六、一九九二年十一月) は、

「ここでお光が『汽車の女』と比較されることで、三四郎にとつて『再発見されている』ことを指摘している。

(3) (4) (5) 中山和子『『三四郎』——「商売結婚」と新しい女たち

——「漱石研究」2、一九九四年五月

(6) (7) 玉井敬之「三四郎の感受性——『三四郎』論」前掲書

## 二 〈語り〉の構造——第一章の果たす役割

作品は三四郎を視点人物として設定し、もっぱら三四郎に寄り添いながら、三四郎を含めて登場人物を三人称で呼び、三四郎の心理に立ち入り説明を加え、状況に意味付けし言及する〈語り〉によって進められてゆく。この〈語り〉は『吾輩は猫である』ほど極端ではないが、しばしば読者を強く誘導するために物語に介入する点でイントルーシブ・ナラティブ(Intrusive Narrative) が採用されて

いると、いいだろう。例えば次のような箇所である。

①これは三四郎にも女にも相応な汚い看板であった。(一)

②と云ふ様な未来をだらしなく考へて、大いに元気を回復して見ると(同)

③けれども学生生活の裏面に横たはる思想界の活動には毫も気が付かなかつた。——明治の思想は西洋の歴史にあらはれた三百年の活動を四十年で繰返してゐる。(二)

④けれども田舎者だから、此色彩がどういふ風に奇麗なのだから、口にも云へず、筆にも書けない。(同)

⑤この田舎出の青年には、全てが解らなかつた。(同)

⑥相手の三四郎が、さう流暢に頼まれる必要のない男だから、すぐ承知して仕舞つた。(三)

⑦光線の圧力を試験する人の性癖が、かう云ふ場合にも、同じ態度であらはれてくるのだとは丸で気が付かなかつた。年が若いからだろう。(同)

⑧田舎者だから敲するなぞと云ふ気の利いた事はやらない。(同)

⑨きりゝとしてゐる。然し鷹揚である。たゞ夏のさかりに権の實が生つてゐるのかと人に利きさうには思はれなかつた。三四郎はそんな事に氣のつく余裕はない。(同)

⑩そのうち秋は高くなる。食欲は進む。二十三の青年が到底人生に疲れてゐる事が出来ない時節が来た。(四)

⑪三四郎は勉強家といふより寧ろ低徊家なので、割合書物を読まない。(同)

⑫のみならず悪く解釈すると、政略的の意味もあるかも知れない書方である。田舎者の三四郎にはつゞき其処と氣取る事は出来なかつたが、たゞ読んだあとで、自分の心を探つて見て、何処かに不満足がある様に覺えた。(六)

⑬三四郎は正直だから下宿の拂を氣にしてゐる。(八)

⑭三四郎は本来から欺んな男である。用談があつて人と会見の約束などをする時には、先方が何う出るだろうといふ事許り想像する。自分が、こんな顔をして、こんな事を、こんな声で云つて遣らう杯とは決して考へない。しかも会見が済むと後から屹度其方を考へる。さうして後悔する。(同)

⑮三四郎は他の文章と、他の葬式を他所から見た。もし誰か来て、序に美禰子を他所から見ると注意したら、三四郎は驚いたに違ひない。三四郎は美禰子を他所から見ると出来ない様な眼になつてゐる。(十)

⑯氣の小さい三四郎が見ると、心配になる位渡して歩く。(十一)

(傍線論者)

これらの箇所は三四郎の視点を通した（語り）ではなく、（語り手）自身の価値観が露骨に示された部分である。①と⑥は、三四郎が「高等学校の夏帽」（一）に対して抱く誇りとは裏腹に、彼が期待する扱いを受けていないことを示し、そのことによって三四郎の大学生としての誇りまでを揶揄している。また②ではあからさまに三四郎の行動を揶揄し、また⑦や⑩では三四郎の（若さ）を強調している。さらに④⑤⑧⑩は着物の色合いや病室を訪問する際のマナーなど、三四郎の（知らないこと・理解できないこと）の原因をことごとく（地方出身者）であることに帰結している。また⑪⑬⑭⑯は三四郎が自覚しているか否かは別として、彼の性格について分析を加えている。また⑨はよし子の病室を尋ねた美禰子の声についての描写であるが、明らかに池の縁での美禰子の言動を揶揄し、美禰子が二つの声を使い分けることができることを読者に示すと同時に、三四郎がそのことに気づいていないことを示している。また③と⑫は三四郎についてではなく、物語全体の方向に関わる表現である。まず③は『三四郎』という作品が抱える明治の日本の現状を指す。まず③は『三四郎』という作品が「偉大なる暗闇」を読んでその意味を理解できなかったことを示すと同時に、全文が明らかにされていないにもかかわらずその内容を「政略的」と規定すること、広田先生を文科大学に招聘しようとする与次郎の企てが失敗に終わ

ることを読者に予想させるためのまさに（政略的な語り）なのだ。さらに⑮が示すことは、もし三四郎が「美禰子を他所から見」ることができると視点を獲得していたら、物語は明らかに別の相貌を浮かび上がらせていたということであり、それはとりもなおさず三四郎がこの段階で抱く美禰子への認識が間違っているということである。このように物語は「三四郎を愚に」<sup>1</sup>する方向に読者を強く誘導するために、三四郎の視点から離れて（語り手）自らの価値観を反映させた（語り）<sup>2</sup>を随所にちりばめつつ、その一方で三四郎の視点によりそって出来事を簡潔に映し出してゆく（語り）を交錯させることによって進められてゆく。この二方向に働く（語り）こそが三四郎を相対化し、読者の（笑い）<sup>3</sup>を誘うと同時に、三四郎への共感感情をも生み出すのだ。

物語は小川三四郎という一人の青年が郷里の熊本の高等学校を卒業し、東京帝国大学文科大学に入学するために上京する車中の出来事を丹念に描き出すところから始まっている。とりわけ第一章においては、名古屋での一夜を含めて三四郎が東京に着くまでに、（印象的かつ衝動的な出会い）を為した一人の女と一人の男とのやりとりを描くことに終始するといっていだろう。「名古屋留り」（一）の汽車に乗り合わせた女から「一人では気味が悪いから」「迷惑でも宿屋へ案内して呉れ」（同）と頼まれた三四郎は、「頗る躊躇した

にはしたが、断然断る勇氣も出」(同) せないまま、同宿することとなる(この節の引用は特記のない限り一章からのものである)。  
のみならず一つ部屋で同衾するという事態にまで発展するのであるが、「蒲団の真中に白い長い仕切りを拵え」何事もなく翌朝を迎え女から「あなたは餘つ程度胸のない方ですね」という言葉を投げかけられた時、三四郎は「二十三年の弱点が一度に露見した様な心持」がしたというのが名古屋での同衾事件の顛末であった。しかもこれら一連の出来事が、女から宿に案内を請われた折に三四郎が「好い加減な生返事」(同) をしてしまったことが発端となり、女が「後ろから尾いて」(同) くることを知りつつ「仕方がない」と放置し、宿帳に記帳する際も女が「湯から出る迄待つて居れば好かつたと思つたが、仕方」がないので(妻) と記帳したというのである。まずここで注意しなければならないのは、三四郎が「不器用に事のなりゆきに流されて」<sup>(4)</sup> ゆくという構図が(若く、経験に乏しく、世間知らずな、地方出身者)であることを(語り手)が強調するが故に、いかにも(仕方のないこと)として読者が納得するように語られているということである。その一方で(語り手)は「五分に一度位は眼を上げて女の方を見ていた」三四郎の視線と、その視線を「充分に意識」して同衾という事態にも動じない女の姿と、<sup>(5)</sup> 断固たる態度で拒絶するのではなく(仕方なく)宿帳に(妻)と記帳する

矛盾した三四郎の行動をも同時に映し出しているのだ。しかも一人になった三四郎はこの女のことを「どこの馬の骨だか分からないもの」と呼ぶことで、かろうじて自らの矜持を保とうとするのである。「徽章」の跡の残る「高等学校の夏帽」の価値を理解し得ない女を侮辱しつつ、それにもかかわらず巻き込まれてゆくという構図は女と別れてから出会った「髭を濃く生して」「面長の瘦ぎずの、どことなく神主じみた男」との多岐にわたる会話においても繰り返されている。初め三四郎はこの男を「中学校の教師と鑑定」し、「是より先もう発展しさうにもない」こと、「三等へ乗つてゐる位だから大したものではない」こと、また水蜜桃の話からは「随分詰まらない事を云う人」という具合に明らかに侮蔑の視線を投げかけている。子規の話から豚の鼻が延びる話に至つて「真面目だか冗談だか、判断と区別」できないまま「吹き出し」てしまい、レオナルド・ダ・ヴィンチに話が及んで「少しく辟易し」、<sup>(6)</sup>「妙に不愉快になつたから、謹んで黙つて」しまうのであるが、ここでの(三四郎の沈黙)は見くびっていた相手から自分の理解の範疇を越えた会話を仕掛けられたことで徐々に混乱しつつあることを如実に示すものである。そして最終的に日本の将来に話が進み、その話振りから「自分の年齢の若いのに乗じて、他を愚弄するのではなからうか」とまで考え、「見当がつかないから、相手になるのを已めて黙つて仕舞」う。そ

こで「日本より頭の方が広いでせう。」「因われちゃ駄目だ。」という言葉を聞いて、それまでのこの男に対する評価が完全に逆転し、三四郎の抱いていた自信は一気に失われる。そして「真実熊本をでた様な心持」を抱き、「同時に熊本に居た時の自分は非常に卑怯であつた」ことを痛感するのだ。ところが三四郎はこれほどに打ちのめされながらも「東京に着きさへすれば、此位の男は到る処に居るものと信じて、別に姓名を尋ね様とも」しないのである。ここでは三四郎が自らの「自負心」「己惚」を意識すればするほど、「見くびった相手から真実を突き付けられる」という第一章の二つの挿話に共通する構図がより際立つ仕組みになっているのだ。

三四郎は「東京に着きさへすれば、此位の男は到る処に居るもの」として、東京でのこの男と広田先生との再会の可能性など考えもしていないが、汽車に乗り込み「自分の席に帰る三四郎」の「古帽子の徽章の痕」に目をとめ、大学に進学するための上京であることを確認した広田先生は、この時東京で三四郎と十中八九再会するであろうことを知っている。まさに三四郎の東京での生活は、広田先生と何らかの形で関係を持つ人々と関わることから始められるのだ。

註(1) 森田草平「無題」『国民新聞』一九〇九年十月

(2) ジェイ・ルービン(『三四郎——幻滅への序曲——』「季刊芸術」三十、一九七四年七月)氏は、この点について「三四郎は若い

からとか田舎者だからなどといった三四郎の無理解を強調しようとするが、こういう語り手の説明は、どちらかといえば三四郎の性格描写の弱点になっているようである。」と指摘する。論者は逆にその「強調」の故に、三四郎の性格が浮かび上がってくるように仕掛けられていると考えている。

(3) 谷口巖『三四郎』を讀む―その(笑い)と(女)とについて―

「人文論究」二十八、北海道教育大学函館人文学会、一九六八年五月

(4) 中山和子『三四郎』——「商売結婚」と新しい女たち——「漱石研究」2、一九九四年五月

(5) 確かにこの女の言動は充分に意識的である。例えば「あなたは餘つ程度胸のない方ですネ」という言葉は、その前夜三四郎が「何もしなかつたこと」に向けられた言葉であり、つまりそのことは「度胸」があれば女と性的関係を持ったであろうことを前提とする言葉であるからだ。

### 三 東京での生活のはじまり

村田好哉氏は、『三四郎』という作品が「人と人との出会いを描いて印象的である」と指摘したが、確かに第一章において三四郎が「二人の男と一人の女と印象的かつ衝撃的な出会い」を為すという構図は続く二章においても繰り返されている。

「激烈な活動」(二・なおこの節での引用は特記のない限り二章からのものである)を展開している東京に降り立って、眼前に繰り広げられているあらゆる出来事に「驚いた」三四郎は、「今迄の学

問はこの驚きを予防する上に於て売薬程の効能もなかった」ことを自覚し「不安」と「不愉快」とを感じている。これは三四郎の眼前に立ち現れた現実が、彼が今まで受けた教育とそれを基盤とする自信によって十分に切り結んでゆくことが可能なものではなく、自分が現実世界から完全に取り残されてしまったことに気づいたことから生じている。そして「現実世界と毫も接触してゐない」ことに苛立ち「鬱ぎ込んで」いた三四郎は、母からの手紙でようやく「勝田の政さんの従弟に当る人」で「大学校を卒業して、理科大学に出てゐる」「野々宮宗八」を尋ねるといふ行動を起こす。ところがここでも三四郎は、外界から遮断された暗い「穴倉」のような研究室で「光線の圧力を試験する」野々宮さんの姿を見てひたすら驚くしか術はない。研究室を辞し、静かな池の縁で三四郎はこの野々宮との出会いを反芻しつつ、まずその「質素な服装」を「電灯会社の技手位」のものと思なし、その研究を「現実世界と交渉のない」ものと考えている。そして野々宮が「生涯現実世界と接触する気がないのかもしれない」と決めつけ、「自分もいつそのこと気を散らさずに、活きた世の中と関係のない生涯を送つてみようかしらん」とまで考えて、かつてない「孤独」を覚えるのだ。しかしこの「孤独」の思いは長くは続かない。三四郎が「汽車の女」を思いだし、思わず顔を「赤くし」たのと軌を一にして岡の上に美禰子が姿を現すのであ

る。三四郎が「自分にはどうしても必要」だけれども「危なくて近寄れない気がする」と考える「現実世界」が、再び姿を変えて三四郎の前に迫ってきているのだ。三四郎は美禰子が岡の上から坂を下りて石橋を渡り、水際を伝つてこちらにくるまでの一部始終を見つめていた。この場面において美禰子が何を考えていたかはこの後も一切明かされることはないが、三四郎に一瞥をあたえ「今迄嗅いで居た白い花を三四郎の前に落として」立ち去るといふ行為の中に、美禰子もまたその三四郎の視線を十分に感じていたことを確かめることができる。三四郎はこの美禰子の一瞥を「汽車の女に『あなたは度胸のない方ですね』と云はれた時の感じと何処か似通つてゐる」と考えるのであるが、いずれにしても三四郎は第一章の「汽車の女」に対して何もできなかったように、(目の前に落とされた花を拾い上げ手渡す)でもなく、あるいは(声をかける)でもなく、為す術もなく呆然とその後ろ姿を見送るのである。この後再び三四郎の前に現れた野々宮は、研究室を辞した後池の端で三四郎が野々宮について考えたことを見透かすかのように、「人が見ると穴倉のなかで冗談をしてゐる様だが、是でも遣つてゐる当人の頭の中は激烈に働いてゐる」ことを語るのだ。この野々宮の言葉もまた屈折している。この言葉は野々宮自身がたとえどれほど自分の研究に対して強烈な自信・自負を抱いていたとしても、また自分のしているこ

とがたとえどれほど「激烈」なものであることを強調したとしても、一見したところでは「冗談」のようにしか見えないことを自覚していることを表しているからだ。それはつまり、現実世界と十分に切り結んでいるはずの野々宮もまた、自らの活動にふさわしい扱いを現実から受けていないことに気づき、〈現実とのずれ〉に悩む人物であることを示している。ともあれここで印象的な美禰子との出会いを挟んで三四郎を相手に展開される野々宮の言動は重要である。

岡の上から見える建物と池の配置に関する野々宮の鑑賞力、白い薄雲についての説明、ラスキンの詩、七歳の年齢差をめぐる会話、日本小間物屋で買った「蟬の羽の様なリボン」等、三四郎はことごとく野々宮の語ることから取り残されているからだ。いずれにしても三四郎は自ら行動を起こしたのではなく、「古ぼけた昔から届いた様な氣」がする母からの手紙に導かれて、その指示通りに「勝田の政さんの従弟」にあたる野々宮宗八に挨拶に行ったところから、本当の意味で東京での生活が開始されているといいだろう。

新学期が始まって三四郎はまず講義の折に隣の席に座った佐々木与次郎と「口を利く様になつた」(三) ことを皮切りに、「電車に乗る」(同) ことと「図書館に這入る」(同) ことを覚え、野々宮が与次郎の寄宿先の広田という「高等学校の先生」(同) の教え子であったことを知る。さらに「四五日前」引越したばかりだという

野々宮の大久保の家を訪ね、そこで妹のよし子が大学病院へ入院していること、母が看病のため上京していることを知らされ、おまけにその晩よし子から電報で呼び出された野々宮の留守中に自殺した若い女の轢死体を見ることになるのだ。その晩一人になった三四郎は野々宮の妹から池の女、さらに病気の妹を抱え大学から遠い大久保に越さなければならなかった野々宮の経済状態へと思いを巡らしていたのであるが、その時間こえた「あゝあゝ、もう少しの間だ」という声を「凡てに捨てられた人の、凡てから返事を予期しない、真実の独白」と受け止め、ほんの少し前迄は確かに生きていた女の無残な運命に思いを巡らし、汽車の男の語った言葉を分析して次のように考えている。

危ない危ないと云ひながら、あの男はいやに落ち着いてゐた。つまり危ない危ないと云ひ得る程に、自分は危なくない地位に立つてゐれば、あんな男にもなれるのだろう。世の中にあて、世の中を傍観してゐる人は此処に面白味があるかもしれない。どうもあの水蜜桃の食ひ具合から、青木堂で茶を呑んでは煙草を吸ひ、煙草を吸つては茶を呑んで、凝と正面を見てゐた様子は、正に此種の人物である。——批評家である。

この三四郎の言葉は、広田先生の言葉と行動が必ずしも一致していないことを指摘するのみならず、この物語で広田先生が果たす役

割すなわち「批評家」の域を出ないことを読者に知らせる伏線ともなっている。さらに続けて三四郎は「此静な書齋の主人は、あの批評家と同じく無事で幸福であると思つた。——光線の圧力を研究する為に、女を犠牲させる事はあるまい。」と考えるのであるが、この言葉もまた野々宮のこの物語で果たす役割を十分に予見し、伏線となる言葉である。何故なら後に詳述するが、野々宮さんと浅からぬ関係にあった美禰子は自殺こそしないが、「批評家」としての態度を貫く野々宮に常に期待を裏切られているからだ。

翌朝「裕を一枚病院まで」届けるよう頼まれた三四郎は、よし子とその母と対面し、さらによし子を見舞いに訪れた「池の女」と再会する。この病院での出会いは、三四郎にとって「池の女」が野々宮一家と何らかのつながりがあることが判明したばかりでなく、「池の女」美禰子にとつても三四郎を野々宮一家との関わりにおいて認識することになる重要な契機となっている。この時三四郎は「女の結んでいたリボン」が「野々宮君が兼安で買ったものと同じ」であることに気づく。女性に装身具を贈るということは、ある程度親しい男女の間ではより深い好意を示す絶好の機会となることは、いみじくも三四郎が三輪田のお光さんにか買つて送ろうと思いついた時、お光さんが「鮎のお礼とは思はずに、吃度何だかんだと手前勝手な理屈を附けるに違ひない」と考えて止めにしたことか

らも明らかである。三章というかなり早い段階で、三四郎は野々宮と美禰子が単なる顔見知り以上の関係にあることを知るのだ。さらに第四章で三四郎の予想どおり「汽車の男」が広田先生であることが判明し、「是から大に活動して、先生を一つ大学教授にして遣らう」という与次郎の画策が明らかとなる。野々宮と美禰子の関係がどのようなものなのかという疑問と、広田先生を文科大学の外国語講師に招聘するという企てと、上京からほぼ半年間の出来事を描くこの物語の主要な二つの出来事が、三四郎の前にその全貌を現したといえる。果たしてこの二つの出来事がどのように展開し、三四郎はどのように関わってゆくのか。

註 (一) 村田好哉『三四郎』の世界「森の女」美禰子をめぐって「日本文芸研究」三十七巻二号、一九八五年七月

(二) 小泉浩一郎(『三四郎』論 美禰子・そのもう一つの画像をめぐり「東海大学紀要文学部」一九八七年九月)

#### 四 それぞれの物語

再会した「池の女」の髪に飾られたリボンが野々宮が買ったものであることを(発見)した時、同時に三四郎は自分の上京にかかわりなく東京で繰り広げられていた物語をも(発見)している。この

三四郎の発見は、(野々宮と美禰子の関係)のみならず、助川是徳氏の指摘するように「広田、野々宮、原口、里見兄妹は、三四郎が現れるより遙か以前から長い友人関係を維持してきた」(1)ことを浮かび上がらせるものでもあるからだ。

例えば美禰子は三四郎と野々宮のどちらを愛していたかという問いに関して伝統的な論の対立が存在するが、リボンのみならず野々宮の背広の隠袋からはみだした封筒の女文字(二二章)、引つ越しの場面で野々宮を追いかけて表へでた美禰子の様子(四章)、菊人形見物の際の野々宮と美禰子の意見の対立と常に野々宮の姿を追い求める美禰子の視線(五章)、運動会での楽しい二人の様子(六章)、丹青会の展覧会での野々宮を挑発する美禰子の態度(八章)、あるいは美禰子の「言伝」を伝えるよし子の言葉に「痒い様な顔」をする野々宮(九章)といったように、東京で広田先生を中心とする人間関係の中に途中から加わった三四郎に与えられた役割は野々宮と美禰子の関係を一つ一つ発見してゆくことにあるといっている。とするならば、(発見されるべき野々宮と美禰子の関係)は物語成立のためには必然のものであるということができるだろう。まさに「美禰子が愛していたのは野々宮であって、三四郎ではない」(3)のである。三四郎はこれらの場面において、ひたすら野々宮の姿を追う美禰子の視線とそれをまんざらでもなく思う野々宮の姿のみならず、

同時に野々宮と美禰子の間に存在する深い溝をも確認することになるのだ。例えば四章で広田先生の新居の二階で雲を眺めながら交わされた三四郎と美禰子の会話である。この時三四郎は美禰子に「白い雲はみんな雪の粉で、下から見てあの位に動く以上は、颯風以上の速度でなくてはならないと、此間野々宮さんから聞いた通りを教へ」(四)るのであるが、美禰子は「否定を許さぬ様な調子で」「雪ぢや詰まらないわね」(同)と言い放つのだ。この時三四郎は言うまでもなく野々宮の代理を果たしている。

また五章での兄野々宮に対するよし子の評価も重要である。(4)

よし子は三四郎に妙な事を聞き出した。それは、自分の兄の野々宮が好か嫌かと云ふ質問であつた。一寸聞くと丸で頑是ない子ども云ひさうな事であるが、よし子の意味はもう少し深い所にあつた。研究心の強い学問好きの人は、万事を研究する気で見ると、情愛が薄くなる訳である。人情で物を見ると、凡てが好き嫌ひの二つになる。研究する気なぞが起るものではない。自分の兄は理学者なものだから、自分を研究して可くない。自分を研究すればする程、自分を可愛がる度は減るのだから、妹に対して不親切になる。けれども、あの位研究好きの兄が、この位自分を可愛がつて呉れるのだから、それを思ふと、兄は日本中で一番偉い人に違いないと云ふ結論であつた。(五)

三四郎はこのよし子の兄に対する批評を聞き「頭がぼんやりして」その意味を正しく理解することができず、ただ「これしきの女の云ふ事を、明瞭に批評し得ないのは、男兒として腑甲斐ない事だと、いたく赤面」(五)し、同時に「東京の女学生は決して馬鹿に出来ないものだ」と云ふ事(同)を悟っている。しかし、三四郎に見えなくとも読者にはよし子の語らんとするところが明らかに見えている。これは野々宮の妹よし子に対する接し方のみならず、誰に対しても、つまり美禰子に対しても「万事を研究する気で見」てしまふことによつて、その結果「情愛が薄くなる」ことを明らかにしているのだ。よし子は美禰子が彼女が望むように兄から愛されることがないことを知っている。しかもこの時同時によし子は兄を「日本中で一番偉い人」と呼び得る程に自分が兄から愛されていることを密やかに誇示してもいるのだ。よし子の美禰子に対する複雑な感情が垣間見える箇所である。<sup>5)</sup>

また五章では野々宮と美禰子の会話のただ中に三四郎は到着するのであるが、ここでの二人の会話は明らかに「空中飛行器」の話に仮託した野々宮と美禰子の恋愛観を示すものである。

「そんな事をすれば、地面の上へ落ちて死ぬ許りだ」是は男の声である。

「死んでも、其方が可いと思ひます」是は女の答である。

「尤もそんな無謀な人間は、高い所から落ちて死ぬ丈の価値は充分ある」(五)

高く飛ぶためには「飛べる丈の措置を考へ」なければならぬとする男と、そのことを理解してはいても身を投げ出そうとする女と、その女に対して男は「死ぬ丈の価値は充分ある」と答えているのだ。美禰子はこの時野々宮から「飛びたければ飛んで勝手に死ぬがいい」と言われたも同然である。一行から離れた美禰子の瞳の中に三四郎が見いだした「苦痛に近き訴え」は、まさに「空中飛行器」に仮託した会話において、野々宮から決定的に突き放されたことによつて引き起こされたものなのである。

途中から再開された「空中飛行器」に関する会話は「女には詩人が多いですね」(同)という野々宮の言葉を受けた「男子の弊は却つて純粹の詩人になり切れない所にあるだろう」(同)という広田先生の言葉で終結するが、これは広田先生が美禰子の野々宮への思いを十分に知つていてその思いを擁護する言葉である。しかも菊人形見物の帰り道、美禰子は「私そんなに生意気に見えますか」(同)という言葉を三四郎に投げかける。この言葉は美禰子が自分の言動が他者にとって生意気に見えるものであることを自覚していると同時に、それと同程度において美禰子自身は生意気に見えることを不本意に思つてゐることを意味している。この場面においては

「迷子」の英訳を知らなかった三四郎が「いたづらに女の顔を眺めて黙つてゐた」ことに対して発せられた言葉であるが、「そんな」という言葉から、今までも（生意気に思つてほしくない場面において生意気と受け取られかねない言動を取つてしまふ）という状況がしばしば繰り返されたであろうことが予想される。とするならば美禰子が誰に対して生意気に見えることを不本意に思うかはすでに明らかであろう。この美禰子の言葉を受けて三四郎は次のように考へている。

其調子には弁解の心持がある。三四郎は意外の感に打たれた。今迄は霧の中にあつた。霧が晴れれば好いと思つてゐた。此言葉で霧が晴れた。明瞭な女が出て来た。晴れたのが恨めしい気がする。三四郎は美禰子の態度を故の様な、——二人の頭の上に広がつてゐる、澄むとも濁るとも片付かない空の様な、——意味のあるものにしたかつた。けれども、それは女の機嫌を取るための挨拶位で戻せるものではないと思つた。女は卒然として、「ぢや、もう帰りませう」と云つた。厭味のある言ひ方ではなかつた。たゞ三四郎にとつて自分は興味のないものと諦める様に静かな口調であつた。(同)

「明瞭な女が出て来た」ことを「恨めしい気がする」と考える三四郎と、自分の問いかけに対して考へたまま黙り込む三四郎を見て

「自分は興味のないものと諦める様に静かな口調」で語る美禰子の姿から、内田道雄氏は「この二者にとつてすでに決定的な分れ」<sup>(6)</sup>「一つの決算が行われたことを示す」と指摘する。確かに（語り手）は三四郎の視点から（意味のある）美禰子の姿を追うのであるが、逆に美禰子の目に映る三四郎の姿は、池の縁での出会いの場面に顕著なように、目の前に投げられた花を拾い美禰子に声をかけ手渡すでもなく、またこの場面の様に肝心な美禰子の問いに対して（黙りこんでしまふ人物<sup>(7)</sup>）として描かれていふことには注意が必要であろう。三四郎の内面がたとえどのようなものであろうと、美禰子の目には三四郎は（不機嫌に黙り込む男）としか映らないのである。美禰子はこの菊人形見物において、野々宮が（死ぬことが分かつていても、身を投げ出して飛び込む）という美禰子の心情を理解できて、それを容認できる男ではないことを確認する。さらにまた、三四郎に至つては、美禰子の心情そのものを理解できる男ではないことを知るのである。そしてたとえ「詰まらな」（同）く感じられたとしても「安全で地面の上に立つてゐるのが一番好い事」（同）と認識し、結婚に関して「安全な」その道を主体的に選ぶことによってゆく決心を固める重要な契機となつてゐるのだ。

ところが六章の運動会の場面以降では、三四郎の美禰子に対する行動が明らかに変化してくる。三四郎は菊人形見物の日とは対照的

な野々宮と美禰子の親しげな様子を目の当たりにして、「此方からあまり御機嫌を取りたくない」（六）と考えるのであるが、さらに三四郎に対して「丸で高い木を眺める様な」（同）視線を投げかける美禰子に対して「夫より、あなた方こそ何故出て来たんです。大変熱心に見て居たぢやありませんか」（同）と自ら積極的に声をかけるのである。この言葉を聞いて美禰子は「始めて、少し笑う」のであるが、この三四郎の言葉は彼が運動会の会場で競技を見ていたのではなく、その間中ずっと美禰子を見ていたことを露にするものであった。美禰子の（笑い）<sup>(8)</sup>は、美禰子と野々宮の仲を知りつつもなお、あるいは知るがゆえになおさら強く三四郎が自分に關心を持っていることに対して向けられた優越感に満ちた辛辣な微笑なのだ。そしてここでも三四郎には美禰子の「其笑いの意味が能く分か」（同）ってはいない。

さらにまた八章において与次郎が使い込んだ二十円の金を立て替えた三四郎が、その二十円を美禰子に借りに行く場面においても同様である。三四郎は美禰子の真意がどこにあるかを疑いつつも美禰子の家を訪ね、そこで決定的に美禰子に突き放されている。美禰子が身に纏う「光る絹」（八）の着物も結局は「丹青会の展覧会」（同）に行くためのものであり、「自分の為」（同）に着替えたのではないことを三四郎は思い知らされるのだ。しかも展覧会には野々

宮が来ており、着替えた着物にしてもそこでの美禰子の行動にしても、ことごとくが三四郎のその向こうにいる野々宮に向けられたものであることを、三四郎はこの時ようやくはっきりと認識する。美禰子の三四郎に対する態度は、『行人』でのお直の二郎に対する態度と酷似している。二郎と二人きりの和歌山行きが、夫一郎によって仕組みられた以上、そこでのお直の言動のすべてが二郎から一郎に報告されることは明らかで、和歌山でのお直の行動は二郎に向けられたものというよりは、二郎の背後に存在する一郎を意識してなされた一郎に対する挑発なのだ。菊人形見物の場面にしても、美禰子にとつて見物の途中で三四郎と姿を消したという事実そのものよりも、広田先生と野々宮に美禰子が三四郎と一緒に会場から姿を消したことを気づかせることこそが重要だったのだ。展覧会の会場でも同様である。三四郎と共に会場に姿を現し三四郎の耳元で何事かを囁いた美禰子に対して、「妙な連と来ましたね」（同）と野々宮に言わせることこそが、美禰子にとつて何にも増して重要なことだったのである。展覧会の会場で野々宮のみならず三四郎自身も「愚弄」（同）される現場に立たされてもお、普通のものから見れば殆ど借金の札状とは思はれない位に、湯気の立つた」（九）手紙を書く三四郎はすでに、「美禰子を余所から見る事が出来ない様な眼になつて」（同）いるのだ。

三四郎自身が「一家の主から、後戻りをして、再び純書生と同様な生活状態に復するのは、取りも直さず家族制度から一步退いたと同じ事」(六〇)と考えたように、一戸を構えたばかりの野々宮がまた下宿生活に戻った時点で野々宮と美禰子の結婚は少なからず遠のいたといっている。確かに入院したよし子に付き添うための母の上京だったにせよ、よし子が母に伴われて実家に引き上げる可能性もあった訳で、息子宗八の花嫁候補の一人である美禰子に会うこともまた上京の一つの目的だったのではあるまいか。何故なら三四郎がよし子の病床に届け物をしたその日に美禰子もまたよし子の病床を訪れ、よし子に付き添う野々宮の母に出会っているからだ。その時の美禰子の服装は「大学の池の水へ、曇つた常磐木の影が映る時の様」(二二)な色の着物に「黄を含ん」だ帯を締め、着物の柄は「鮮やかな縞が、上から下へ貫」(同)くという玄人好みの装いであった。縞柄はたとえ縞目が細く目立たないものであっても(粋なもの)であっていわゆる(世間の常識)から考えて少なくとも年頃の結婚前の素人の女性が身に纏うものではない。母親を早くに亡くした影響でそのような好みになったと考えると、あるいは病氣見舞いであるから華やかな色合いの着物を避けたと考えると、深い緑の鮮やかな縞目の着物に同系色の帯という美禰子のいでたちを見た野々宮の母が、どのように考えたかは明らかである。野々宮の母が帰郷した時点で、

この結婚話は立ち消えになったと考えるべきであろう。作中美禰子は広田先生の引つ越しの折りには「何時ものやうに光らない」「地が何だかぶつぶつしてゐる」「縞だか模様だかある」「その模様が如何にも出鱈目」(四)に見える着物を着ている。これは多分ふだん着の(しかし高価な)織りの着物であろう。さらに運動会や展覧会では華やかな「光る絹」を着るのであるから、状況に応じて着物を選ぶことができるのであるが、その趣味については前述の通りである。漱石は『虞美人草』において藤尾には「紫の着物」(『虞美人草』二)を着せ、一方小夜子には「高島田」(同五)を結わせ、「薄く染めた綸子の被布」(同)を着せることで、読者にそれぞれの女性の育つた環境と受けた家庭教育とさらにはその人となりとを推測させるような衣装を描き分けた作家である。野々宮の母と会う日に身に纏つた派手な美禰子の着物は重要な意味を持っているといえよう。三四郎が美禰子に「惚れられてゐるんだか、馬鹿にされてゐるんだか、怖がつて可いんだか、蔑んで可いんだか、廃すべきだか、続けべきだか訳の分からない囚はれ方」(七)をして、野々宮と美禰子が結婚するかどうか悩んでいるうちに、二つの縁談が持ち上がる。よし子と美禰子の兄里見恭助の縁談である。しかもこの二つの縁談の間から不意に美禰子の結婚話が持ち上がるのだ。美禰子は一体どのような結婚を選んでゆくのか。

## 註

- (1) 助川是徳『三四郎』の時間 『原景と写像 近代日本文学論攷』一九八六年一月
- (2) 三四郎を愛していたとする三好行雄（「迷羊の群れ——『三四郎』」『作品論の試み』至文堂、一九六七年六月）は美禰子が残した「森の女」という肖像画から、美禰子が三四郎を愛していたと結論づけている。
- (3) 酒井英行「広田先生の夢——『三四郎』から『それから』へ——」『文芸と批評』四・十、一九七八年七月
- (4) 小泉浩一郎（『三四郎』論 美禰子・そのもう一つの画像をめぐる）『東海大学紀要文学部』四十七、一九八七年九月）氏は、「よし子の野々宮評の明かすものは」（愛）は（認識の錯誤）としてのみ可能である、という不易の真理に外ならない」と指摘する。
- (5) 村瀬士郎（『三』と『四』の図像学 『三四郎』 切断される少女たち——「漱石研究」2、一九九四年五月）氏は、よし子の抱く複雑な感情について「よし子と美禰子の対立は、野々宮の愛をめぐる形で成立しており、野々宮と美禰子の結婚が、自分の自由を奪うものである以上、よし子は意識するしないにかかわらず、それを守るために兄の愛を争っていたにはちがいない」と指摘している。
- (6) 内田道雄『三四郎』論——上京する青年——『国文学言語と文芸』七十五、一九七〇年三月
- (7) しかしこの三四郎の態度は美禰子に対してのみならず、第一章から一貫して自分の理解の範疇を越えた出来事や人物と遭遇した場合に黙り込んでしまう人物として描かれていたことを忘れてはならないだろう。
- (8) 江種満子（『三四郎』論——美禰子を読む——）『日本文学』三十一、一九八二年十二月）氏はここでの美禰子の「笑い」を、「三四郎が彼女を気にかげ注視し」「野々宮への妬心を垣間見せるほど執着していることを確かめることに、少しずつ安心し、笑顔を取り戻

す」と解釈しているが、本論においては全く逆の立場を取るものがある。

## 五 ガートルードの再婚／美禰子の結婚

野々宮とよし子の関係が、三四郎の視点を通して「此兄妹は絶えず往来してゐないと治まらない様に出来上がってゐる」（六）と語られるのと対照的に、美禰子の兄恭助は作品中現実には一度も姿を見せることなく、よし子と原口の口から語られるのみであることに注意が必要であろう。美禰子は両親のみならず、広田先生と親しかったという長兄にも先立たれ、「法学士」（五）で、原口から「妹はあんなに器用なのに」「丸で片無し」（同）と評される兄恭助との関係が野々宮兄妹とはまさに対照的なものであったこと<sup>1)</sup>は、比較的内容易に想像がつく。少なくとも菊人形見物にする、文芸協会の演芸会にしる、美禰子は自分の兄ではなく野々宮に連れていってくれるように頼むのである。その兄が結婚するということは、「すると貴方は何うなります」（十）という原口の言葉に代表されるように、美禰子自身の身の処し方が問題となることはしばしば指摘されてきたとおりである。美禰子が（空を眺めること）、とりわけ「雲」を眺めるのが好きな女性であることも、彼女の孤独な境遇を考えた場

合に象徴的である。<sup>(3)</sup>内面を吐露する発言が作品中に殆ど見られない美禰子の唯一の自己表現ともいうべきものが、この〈空を眺める〉という行為であり、まさにそこが美禰子の内面を推測するための手掛かりとなるものなのだ。「雲」はまず形が定まらず、また太陽の光を遮るものとして地上に影をおとし、消えてゆくものである。さらには太陽が永続的な存在であるのに対して、太陽の手前において、無定形で永続性を拒絶するものとして「死」の象徴ともなる。<sup>(4)</sup>まさに『三四郎』における「雲」の表現こそは、〈常に姿を変え続けるもの〉(遮られるもの)としての〈美禰子の存在〉を象徴的に現すものとして登場しているのだ。

よし子の縁談が「知りもしない人の所へ、行くか行かないかつて聞いたつて。好でも嫌でもないんだから、何も云ひ様はありやしないわ。」(九)というよし子自身の言葉によって退けられたように、結婚に関するよし子のこの発言は(結婚は愛している人間とするものである)という「近代的恋愛観・結婚観」に基づくものである。少なくともその当時の女性にとつて「知りもしない人の所へ」嫁に行くのがごく一般的な事例であったからである。ところがまだ女学校に通う若い女生徒であるよし子に比べて、二十三歳という当時では適齢期を過ぎた年齢の身禰子にとつては、兄の縁談が持ち上がった時点で見禰子自身の身の処し方を早急に決めなければならないと

いう状況に迫られているのである。「どうだらう、何所か好い口はないだらうか。里見にも頼まれてゐるんだが」(七)という原口の言葉にもあるように、美禰子の兄の恭助も妹の縁談に心を砕いていることは確かである。例えば美禰子の結婚が決定するまでの経緯を考えてみると、確かに美禰子の結婚相手はよし子との縁談に応じた人物ではあるが、この人物の友人が美禰子の兄の恭助であることを考えると、野々宮によし子の縁談を持ち込んだのは恭助であるかもしれない、いずれにしても恭助は自分の友人に美しさという点では遜色がないにせよ行き遅れている妹よりも、まず両親が揃い学者の兄がいてさらに若さという点でより条件の良いよし子を勧めたとも考えられるからだ。(美禰子の結婚)が示すものは、女性にとつて家から独立するためには結婚して夫に養われるより他に道がないという当時の文化的・社会的背景を浮かび上がらせるのは勿論のこと、物語中の他の登場人物のみならず読者にも、その結婚が早すぎる選択・早すぎる決断と思わせておいて、実は美禰子が兄の許で暮らしていた頃と同じ水準の生活を維持することのできる結婚を選んだという点である。美禰子にとつて野々宮との結婚が意味するものは、たとえどれほど美禰子が野々宮を愛したとしても、野々宮は美禰子の望むような愛の表現を与えてはくれないということであり、また生活の水準という点でいえば現在の美禰子に許されている生活とは

比べものにならないような耐乏生活が待っているということである。『虞美人草』の藤尾が「捕るは容易」(『虞美人草』十二)であつても「馴らす」のは「困難」(同)な宗近一ではなく、「顎で合図をすれば、すぐ来る」(同)小野清三を選んだように、美禰子の選んだ相手は「捕るも容易、馴らすのも容易」な男であつたことは間違いない。結婚前は原口のアトリエからの帰りが遅くなつた美禰子を迎へて来た様子(第十章)といい、結婚後丹青会の会場で美禰子の絵を前にして、「眼鏡の奥からじつと眸を凝らし」(十三)、絵の構図が「細君の手柄だと聞いて」「嬉しそう」に「一番鄭重な礼を述べた」(同)様子といい、少なくとも美禰子が期待する通りの反応を見せる男なのだ。たとえよし子にとっては「知りもしない男」であつたとしても、少なくとも美禰子にとっては兄の友人で「知つていた」男に嫁ぐというのが(美禰子の選んだ結婚)なのである。

(結婚)に悩むのは女ばかりではない。自らをハムレットに準える広田先生は、母が臨終に際して打ち明けた自らの出生にまつわる秘密から「結婚に信仰を置かなく」(十一)なつた人物の一人であることを三四郎に語るが、重松泰雄氏の指摘するように「母の真実の事情」(6)を思いやることをしてはいない。広田先生が(母の中の女の部分)を発見し嫌悪すると同時にそのことに悩み、ついには女性全体を嫌悪するに至るといふ広田先生の思考からは、完全に(女が

初めから母として存在する訳ではない)という自明のことが欠落している。

ハムレットも同様である。ハムレットが嫌悪するのは、当時兄妹の妻と再婚することは姦通を犯すこととされてきたにも拘わらずガートルードが夫の死後一カ月で夫の弟クローディアスと結婚したことである。ガートルード自身もまたそのことを自覚しており、ハムレットの苦悩の理由を「父親の死と、私たちの早すぎた結婚 (His father's death and our over-hasty marriage)」にあると考えている。<sup>(7)</sup>

しかし先王が亡くなり当然その後を継ぐものとして期待されていた王子ハムレットが退けられ、先王の弟クローディアスが王位の座についた時点で、ガートルードの決意は固まつたと見ていいだろう。

クローディアスとの再婚が意味することは、彼女が引き続き王妃の座につくということである。そうすればハムレットはたとえ義理とはいえ、新王クローディアスの息子となるのだ。次期王位は息子ハムレットのものとなる。ハムレットはオフェリアの口を通して「貴族としての弁舌に優れ、武勇の誉れ高く、また学者としても優れた洞察力を兼ね備え、美しいこのデンマークの花とも比すべき後継者として囑望され、流行の鑑、礼節の手本として常に衆目の的であつた方」(The courtier's, soldier's, scholar's eye, tongue, sword, th' expectancy and rose of the fair state, the glass of fashion and the mould

of form, th' observed of all observers) と語られる人物である。(8) それだけの器量を備えながら、野心がないばかりに国王の座を奪われた息子を目の当たりにして、ガートルードはハムレットの可能性を信じつつも、ハムレットとクローディアスの二人を天秤にかけ、当面クローディアスを選ぶことによって、新王の妃として再びデンマーク王妃として君臨することを選ぶのだ。ところがハムレットは物語の表面には現れてはこないこの母の内面の葛藤に目を向けることをせず、ひたすら「母の裏切り」にのみ固執するのである。

〈ガートルードの再婚〉と〈美禰子の結婚〉の共通点は、いずれも再婚や結婚に至るまでの彼女たちの内面の動き(考え)が明らかにされていないこと、いずれの場合も物語の登場人物たちにとっても、読者にとっても彼女たちの結婚が予期しない突然のものと思われていること、またさらに彼女たちの結婚が前夫、あるいは相手と見なされていた男から裏切りと見做されていること、つまりガートルードの場合は先王は亡霊となつてハムレットに妻の裏切りを嘆き、また野々宮は美禰子の肖像画の前で美禰子の結婚披露の「招待状を引き千切つて床の上に捨て」(十三)る。〈黙つて捨て〉という描写を選ぶこともできる場面において、「引き千切る」という言葉を選んだ(語り手)はこの行為の中に野々宮の美禰子に対する(未練)を表現している。そして彼女たちの結婚が、たとえそれが不本

意な結婚であつたにせよ(現在の自分の置かれている地位又は環境を保持するためのものであつた)という点で共通している。まさに美禰子は、現実と折り合うことを選び取つていったのだ。

註(1) 角田孫人(『三四郎』覚書き—美禰子と三四郎)『文学年誌』四、

一九七八年(二月)氏は、美禰子と兄との関係について、「確かに美禰子は兄恭助から放任されている。気ままに外出し、若い男と一緒に歩き、自分の裁量で三十円の金を貸すことができる。しかしそれはまた兄から構いつけられないという域に達していることも見落とすわけにはいかない。」とし、「二人の兄の妹への対し方の違いがちらりとではあるが、鮮やかに描き込まれている。」と指摘する。そして美禰子を「孤独で心の拠り所のない若い娘」と位置づけている。

(2) 助川是徳(『三四郎』の時間)『原景と写像 近代日本文学論攷』一九八六年(一月)氏が指摘するように「真砂町の家に入ってくる新妻にとつて、美禰子は邪魔になる」のである。

(3) 坂本育雄『三四郎』論「鶴見大学紀要(第一部国語・国文学論)一九八七年三月

(4) 『イメージ・シンボル辞典』一三三—一三三ページ

(5) 岩佐莊四郎(『婿捜し婚』から『恋愛小説』へ—『三四郎』への視座—)『日本の文学』2、有精堂一九九三年十二月

(6) 重松康雄(『三四郎』注釈)『日本近代文学大系26夏目漱石集Ⅲ』角川書店、一九七二年(二月)氏は、「彼は三四郎に『囚われちや駄目だ』と忠告していたが、そう言いながら自らは母や女に対する誤つた固定観念に囚われている」として、「母の真実の事情」を見ようとはしていないことを指摘する。

- (7) *The Tragedy of Hamlet Prince of Denmark, The Complete Works of William Shakespeare*, ed. Stanley Wells and Gary Taylor (Oxford: Clarendon Press), p. 748
- (8) *The Tragedy of Hamlet Prince of Denmark, The Complete Works of William Shakespeare*, p. 754
- (9) 第四幕第四場において、ハムレットが自分のふがいなさをノルウェイ王子フォーターティンブラスと比べて嘆く場面がある。

## 結

『三四郎』においては、登場人物の殆どが、自分が期待する評価ないしは扱いを眼前に展開される現実から受けていないことに悩む人々であった。三四郎は東京に降り立った時、彼が熊本で受けた教育が「売薬程の効能もなかった」(二)ことに悩み、また野々宮さんは自分の研究が世界的水準にあること自負しつつ、その一方で「冗談」(同)のようにしか見えないことを自覚している。美禰子もまた「私そんなに生意気に見えますか」(五)という言葉に集約されるように、自分の意図することと行動との食い違いに気づき悩んでいる。美禰子が三四郎の自分への思いを受けて「われは我が咎を知る。我が罪は常に我が前にあり」(十二)という言葉を発表する時、少なくとも三四郎に対する自分の行為が〈罪〉であると規定しているのだ。また与二郎は文科大学に邦人の外国語教員を招聘するため

の活動を展開しているが、彼の身分は東京帝国大学文科大本科生ではなく、選科生である。つまり彼の存在そのものが、本流からは〈ずれ〉た位置にあるという〈ずれ〉である。

広田先生とても例外ではない。あるいは文科大学外国語教員招聘の企てが失敗した時、広田先生が三四郎に語った「存在を無視されてゐる方が、どの位対面を保つに都合が好いか知れやしない」(十一)という言葉の裏には、〈対面を保つのに相応の扱いならいざしらず、相応しくない扱いを受ける位なら無視されている方がいい〉という論理が隠されている。日頃は与二郎から「もう少し出婆婆つて呉れると可い」(四)と考えられている広田先生が抱く自負・矜持である。このように主要な登場人物の殆どが何らかの形で、自らが考え期待することと現実とが必ずしも一致しないという〈ずれ〉に気づき、その〈ずれ〉に悩む人々なのだ。現実と折り合うことを選んだ美禰子の〈それから〉はまだ見えてはいない。しかし『三四郎』以降の作品に底流する〈片の着かない現実〉や〈現実とのずれ〉に悩む人々の系譜がここに始まったといっていいたいだろう。『三四郎』の意義はまさにここにこそ存在するといえる。

(本学助教教授)